



◎まなびの広場 令和7年10月10日発行
偶数月10日発行
令和4年6月10日創刊 通算No.21

10
2025

まなびの広場

— 子どもの未来を共に考える —

VOL.21

編集よりご案内

新たに、京都大学大学院教育学研究科教授の明和政子氏による短期連載が始まります。本号では、AI時代においてヒトの学びの本質を踏まえた、子どもたちの学びの理論を脳科学者の視点から執筆いただきました。

2回目となるECEQ[®]実施園の声では、ECEQ[®]を進めていく中で自身が感じた思い、続けてきたからこそ見えてきたものやECEQ[®]の経験を活かしての取り組みについてご執筆いただきました。

また、令和8・9年度教育研究課題やゆたかなまナビの新たな機能等についてご紹介いたします。

CONTENTS

短期連載①

AI時代を生きる子どもたちへ

■ 明和 政子氏 (京都大学大学院教育学研究科 教授)

(一財)全日私幼研究機構理事長からのご報告

子どもも親も幸せな未来に

■ 安家 周一 (一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 理事長)

令和8・9年度教育研究課題について

■ 岡本 潤子 (一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 教育研究委員長)

ゆたかなまナビの機能開発・改善と今後の展開について

■ 野波 雅紀 (一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 システムチーム長)

ECEQ[®]実施園の声～ECEQ[®]の旅で手にしたもの

■ 菅野 祐輔氏 (聖と学園聖和幼稚園 教務主任)

ECEQ[®] Hot News Vol.4



ヒトらしい学びを理解する

京都大学大学院教育学研究科 教授／明和 政子

この十数年で、私たちの暮らしは劇的に変化しました。とりわけコロナ禍以降、デジタル空間は単なる情報探索の場にとどまらず、人と人との交流やコミュニティ形成の主要な舞台となりました。いまや多くの人が、一日の大半をオンラインで過ごしています。

しかし、こうした環境は、生物としてのヒト「ホモ・サピエンス (*Homo sapiens*)」が数十万年をかけて適応してきた環境とは大きく異なるものです。私たち現代人がもつ脳やこころは、身体の特徴と同じく進化の産物です。身体や脳のはたらきは変わらない一方、環境だけがこれほど急速に変化していく。このミスマッチが拡大し続けるとき、ヒトの脳やこころは今後どのように変容していくのでしょうか。とりわけ、環境の影響を強く受けながら発達する「感受性期」にある子どもたちにどのような影響が及ぶのか。これは脳科学者としての私の強い関心であり、深い不安でもあります。

さらに近年、人類の未来を大きく揺るがす情報技術の革命が起きました。それが、大規模言語モデル (LLM) による生成AIの登場です。その代表例が「Chat(チャット)GPT」でしょう。ChatGPTは、インターネット上に蓄積された膨大なテキストデータを解析し、ユーザーが投げかけた言葉に対して自然な応答を返す能力を持っている点で、これまでのAIとはまったく異なります。しかも、この仕組みは利用者が「望ましい」と評価した応答を学習として取り込みながら改良、更新されていきます。つまり、多数の評価に基づいて最適化されるため、多様な視点や独自の発想は取り込まれにくいのです。

実際にChatGPTを使ってみると、私たちが試行錯誤しながら考えるよりも、はるかに速く、そして的確な答えを導き出してくれることにただ驚くばかりです(図1)。私自身も、気がつけば自分で考える前にChatGPTに尋ねていることも珍しくありません。私の所属する大学でも、課題レポートをChatGPTに書かせているのではないかとと思われる学生が目立ち始めています。この流れは今後さらに加速し、人口減少や少子化の進行ともあいまって、多くの仕事がAIに取って代わられる社会がまもなく訪れます。

* * *

こうした時代を迎えた今、これから子どもたちはどのように成長していくのでしょうか。この問いに向き合うためには、ヒトの学びはAIの学びとは根本的に異なる、という事実を正しく理解しておくことが必要です。



図1 Chat GPTが創作した「子どもがデジタル空間で遊ぶ」イラスト

ヒトは、生まれる前から子宮内をぐるぐると回転したり、指吸いをしたり、子宮の壁を押してみたりと、身体を頻繁に動かして外界を探索しています。生まれてからは、身の回りにある物に手を伸ばし、なめたり叩いたり放り投げたり、と一心不乱に探索する姿をよく目にします。こうした子どもたちのふるまいは、大人から見ると一見「無意味」に感じられます。なぜ子どもたちはこれほど身体を使った活動に夢中になるのでしょうか。それは、自分の身体を使って感じる体験が、子どもの脳やこころに興奮や驚きをもたらすからです。自分の身体を使って「実験」を繰り返し、偶然発見した新しい何か(物理法則や因果、論理など)に気づいて興奮を高めることによって、子どもたちは主体的に自らの知を創造していくのです。

身体を使った活動に夢中になっているとき、子どもたちの脳内では「ドーパミン」という神経伝達物質が放出されています。ドーパミンは、その活動の動機をさらに高め、持続させる生化学的反応、すなわち報酬系のはたらきをもたらします。こうした仕組みはヒトに特有なものではなく、他の動物でも共通してみられます。ヒトも他の動物も子ども期にはよく遊びますが、それは自分の「やりたい」をやってみる、つまり、遊ぶことによって報酬系が活性化し、学びの意欲が強化されるからです。なぜこのような仕組みが備わっているのかといえば、それは外界に適応し、生存の可能性を高めるという種の存続に直結する重要な意義をもっているからにほかなりません。

こうした「やりたい」に突き動かされる活動について、理解しておくべき重要な点がふたつあります。

まず第一に、子どもが何に関心をもち、何をやってみたいかは一人ひとり異なり、きわめて多様であるということです。大人になると、「これは正しい」「これは大切だ」といった信念や先入観が、無意識のうちにこころを支配しがちです。しかし、子どもは違います。子どもたちが何に驚き、何に興奮するのは、自分でやってみなければわかりません。実際に試してみて、脳内でドーパミンが高まる瞬間を体験する。それこそが、もっと知りたい、もっとやってみたいという気持ちを育む原動力となります。

子どもたちは「自分でやってみたいことをやってみる」ことを通して、失敗したときのくやしさを驚き、達成できたときの感動に突き動かされながら、自ら知を創造する活動を続けていくのです（図2）。



図2 やりたいことを自分でやってみたときに生じる心身の経験こそがヒトの学びの土台となる

もうひとつの重要な点、こちらは、ヒトだけにみられるユニークな特性です。先述のように、子どもたちは自分でやってみることで驚いたり、興奮したりしますが、おもしろいことにそれを自分だけの体験にとどめません。自分の驚きや興奮を、「お母さん、見て見て！」「先生、あのね！」と、誰かと共有したがる性質をもっているのです。そして、子どもからその驚きを共有された大人は、「すごいね！」「いっしょにやってみよう！」などと、ポジティブなフィードバックを返します。こうしたやりとりは、ヒトにもっとも近縁なチンパンジーですら

みられません。ヒトの脳は、自分が得た驚き、興奮、喜びを誰かと共有することでドーパミンの放出を持続させる、つまり、学びの動機がいつそう高まっていくように仕組みられているのです（図3）。



図3 ヒトは遊びの中で得た心身の体験を他者と共有することで学びの動機をいつそう持続させていく（提供：認定こども園三国ひかり）

つまり、ヒトの学びの本質はこうです。自分の身体を使って「やってみたい」と思うことに挑戦し、失敗したときの驚きやくやしさを、達成したときの感動を通して、自らの知を生み出していくこと。そして、その体験を他者と共有することで、学びへの意欲をさらに高め、より豊かに発展させていくことです。

今、私たちはAI時代を生きていきます。だからこそ、子どもたちの「やってみたい！」という気持ちを尊重し、一人ひとりの多様な知を育む教育環境の整備がこれまで以上に重要となります。とりわけ、就学前までの「身体を使った遊び」は、ヒトの学びの姿そのものであり、その後の人生を大きく方向づけるものです。創造性や感性、道徳心—AIがとても苦手とするこれらの能力は、まさに幼少期の脳の発達と深く結びついており、その土台を支えるのは身体を使った体験にほかなりません。

* * *

このような見方を軸に、次回は、これからさらに重要性を増していく幼児教育の内容と、その科学的な裏づけについてお話ししたいと思います。

私たちは幼児教育用品を通じ、幼児教育の質の向上に貢献します。



フレーベル館



子どもも親も幸せな未来に

一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構

安家 周一



胎児から小学校1年生くらいまでの育ちを広く社会に啓発するため近年教育書や子育て関連のメディアでもよく使われる、「はじめの100か月の育ちビジョン」が訴えられています。人格形成の基礎にあたる胎児期→乳児期→幼年期から8歳くらいまでの100か月、人それぞれですが、大人になってから思い出そうとしても、なかなか思い出すことが難しい育ちの時期です。

受容され慈しまれていたのか、ほったらかしにされていたのか、怒られてばかりだったのか、私も今は思い出せません。ということは、その時期の養育環境は心の奥深くにしまわれていることになり、その人らしさの基礎となります。大人になってから生きづらさの症状として現れるアダルトチルドレンや引きこもり、自信のなさなど、後の人生に影響が出るともいわれます。

これまでの子どもに対する教育政策や家庭政策を顧みますと、1950年代の高度経済成長期を経て、産児制限などの人口抑制策が打ち込まれました。その後、1.57ショックが日本社会に衝撃を与えました。1990年代には本格的な少子化対策が打たれ、エンゼルプラン（保育所整備・子育て支援）など、産み育てやすい環境が急激に整備されます。効果がなかなか現れないことで、重ねて新エンゼルプランにより、主に親の働き方に準じて標準保育時間は11時間となり、放課後児童対策・育児支援の拡充などの政策に大きな予算が打ち込まれます。2000年代には少子化対策支援法他大綱が整備され、国の政策課題として30年にわたって政策を打ちだし予算をかけ続けましたが、一向に出生数の増加はみられませんでした。

待機児童対策や保護者の「産み育てやすい環境」整備に、有識者の面々がそろそろ様々な審議会でも審議はされていたようですが、残念ながら現在までのところ政策は奏功せず、出生数は下落の一途をたどり、2024年は史上初めて70万人を下回るなど、対策は失敗に終わっています。

その大きな原因の一つと考えられる要素は、保育所増設などの保護者の子育て支援に力点が置かれたため、国の指令で自治体は子育て会議などを組織し、保育所などの施設をやみくもに増設したことです。従来保育所設置には保育士の配置や保育室の面積、環境に最低の基準を設け、子どもの育ちの環境を保護していました。にもかかわらず、3歳未満児だからといって園庭もないビルやマンションの一室に、19人以下の小規模保育所の設置

を許可しました。最低の基準も守られていないのです。

このような政策に象徴されるように、保護者が働き産み育てやすい環境を作るということが最優先課題とされ、多くの子どもは長時間施設に留め置かれました。長時間の保育に保育者たちの苦悩が垣間見えます。低年齢児を持つ保護者の仕事を担保することが優先され、護られなければならない子どもの生活や活動、家族でのだんらんなど、最初の100か月で必要不可欠な暖かい家庭生活はゆがむこととなります。大人ファーストだったのです。

待機児の多かった都市部などでは少々通園に時間がかかっても入所先が決まることで胸をなでおろすことになるのですが、通園時間も含めて子どもが健康に育つ幸せで豊かな環境が与えられたわけではありません。少子化が進む現代では乱立した小規模保育所は廃園を余儀なくされ、投下した税金は泡と化しました。

結婚するのかしいないのか、子どもを産むか産まないのかはそれぞれの自由です。他の人達の今後の年金や国家の行く末のことまで気にしている余裕はないとも思います。反対に、毎日幼子と接する仕事についている私たちは、人の宝物のように輝いている時期に毎日共に生活できるということは、これほどの喜びはなく、子どもたちにありがとう、と心からの感謝が絶えないのです。

私たちは結婚をして子どもを授かることは、どのような教育よりも自分が鍛えられ、人間の成長が得られることを知っています。結果的に孫も生まれ、「来るときは嬉しいけれど、帰るときはもっと嬉しい」などという笑える新聞の投稿に納得する自分がいます。

大学院のゼミを担当いただいた岡部毅教授の伴侶はフランス人でした。その方が日本人の働き方を見て、「日本人は労働を美德」と捉えているようだけど、クリスチャンの私にとっては「労働は神から与えられた苦役」で、それを回避するために夏には1か月も暖かいところに行ってお楽しむのですと話されて、妙に納得したことがありました。

要は、私たちの仕事観や家族観、生き方自体の見直しが必要なのではないかと思うのです。小さい子がいる家庭の大人の労働時間は「みんな7時間」にして給料は据え置き、人生最初の100か月、子どもを取り巻く家族の生活がゆとりをもって楽しめるような政策が、この国には必要です。

創りだそう！こどもの未来を拓く、良質な乳幼児期の教育を届けよう！こどもと共に生きるよろこびを

一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 教育研究委員長／岡本 潤子

令和8年度からの二年間を見据え、全日本私立幼稚園幼児教育研究機構が教育研究課題を定めることの意義を大切に考えながら、これからの歩みを支える言葉を模索してきました。いよいよ全国の仲間の皆様にその主題をお示しする時がまいりました。このたび、令和8・9年度教育研究課題の中心となる主題を『創りだそう！こどもの未来を拓く、良質な乳幼児期の教育を届けよう！こどもと共に生きるよろこびを』といたします。

この言葉を紡ぎ出すにあたり、目の前の子どもたちのウェルビーイングを支えるために必要な教育研究課題を検討することはもちろんですが、その子どもたちと共に生きている私たち保育者のウェルビーイングも共に考えていきたいという思いがありました。それはなぜか。

私たち保育者は、子どもたちの生涯にわたる人格形成の基礎を培うという重要な役割を担い、「人が育つ」という尊い営みの中で生きています。その実践にあたっては社会全体が「子どもは愛おしく、社会にとってかけがえのない存在である」という思いを抱き、赤子であっても一人の「主体者」として尊重し、その権利を保障することを忘れてはなりません。一方で、少子化や社会情勢の変化は子どもを取り巻く環境を大きく揺るがし、教育現場にも深刻な影響を及ぼしています。だからこそ、私たちは改めて自分たちの役割を問い直し、保育者としての誇りを胸に、教育の本質を見失うことなく、子どもの未来を拓く良質な教育と環境を創りだしていかなければなりません。そして各家庭に寄り添いながら、幼い子どもたちと共に生きるよろこびを社会全体に届けていきたいと思ひます。

その美しく愛らしい姿を尊重し、日々子どもたちとの豊かな生活が子どもたちの未来を拓く大きな学びにつながると信じてやみません。日本全国、各地区、各都道

府県の実情に合わせて私たちが学び続けることが、子どもたちの幸せにつながると信じ、質の高い豊かな乳幼児期の教育を紡いでいきたいと願っています。このような思いを含め令和8・9年度教育研究課題を皆様にお届けいたします。各地区や各都道府県での教育研究大会をはじめとした研究や研修の取組の手がかりとしていただければ幸いです。



※主題における「こども」の表記は、こども基本法の理念を踏まえ、また主題として全国の乳幼児期の教育に関わる皆様に親しみやすいものであることを願い、柔らかく「こども」と平仮名表記にいたしました。なお、教育研究課題の重点課題以下、課題と解説につきましては従来通り「子ども」と表記いたします。



【令和8・9年度教育研究課題】

保育施設
導入実績 **No.1**

IP無線機 伝シリーズ
— ニシハタシステム —

災害対策で
2,500園以上が導入！



**園業務のお悩みを
IP無線機で解決！**

無料お試し実施中！

0120-775-956
株式会社 ニシハタシステム



研修機能をより充実へ～ナビのさらなる利便性を求めて～

一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 システムチーム長／野波 雅紀

昨年6月に実施しました「ゆたかなまナビの機能開発・改善のご要望と今後の対応について」（私幼研機構第06066号）におきましては、各都道府県団体様から機能開発・改善要望に多くの意見を賜りありがとうございました。そのご要望を約60項目に集約し1年あまり検討をしましてまいりましたが、ようやく先日リリースさせていただきましたことができました。

ただ、リリース早々に一部の機能について不具合が発生し、皆様にご迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げます。順次修正対応を行い、現在は安定した運用ができるようになってきています。

今回の改修

さて、今回のリリースは都道府県団体管理画面の改修に重点を置きました。「新機能が欲しい」「問い合わせに的確に対応したい」「研修会情報の作成・編集が効率よくできるようにしてほしい」といったミッションをいただきましたので、改修の方向性をそれぞれに定めて27の機能を加えています。

特に研修会の登録画面に多くの変更があります。研修会の種別・形式によって入力項目を非表示にしたり、申込方法、研修会内容、研修スタンプ・レポートの各設定タブを設けスクロール域を抑えたりして、編集のしやすさを考えました。また、プレビュー機能によって設置者画面と教職員画面をモニターできるようにしたこと、研修スタンプと研修受講歴一覧（内閣府様式）にどのように出力されるのかも確認できるようにしました。

設置者管理画面においては、ゆたかなまナビの研修履歴が不用意に変更されないよう、研修受講歴一覧（内閣府様式）をExcel出力したときは初期状態でシートに保護がかかっていますことをご承知おきください。また、研修受講歴一覧（内閣府様式）は、ゆたかなまナビ以外

で受講した研修についても個人管理用研修履歴にご入力いただければ反映されるようになったり、期間を指定して出力できるようになったりと利便性を向上させています。

教職員マイページにおいても、レポートやアンケート内容を提出前に確認できるようになったり、過去に取得した研修スタンプを期間指定のうえ、一括して出力できるようになったりと使いやすさを追求しました。

システム改修を通して

前身である幼稚園ナビの誕生から早8年が経ちました。ゆたかなまナビシステムはこれまでの改修と機能追加により、複雑なパーツが絡み合っていており、ある機能に手を加えると思わぬ箇所が犠牲になったり、全く関係ないところに影響が及んだりします。そのため意見集約からリリースまではそれらの評価に多くの時間を費やしています。また、システム開発の予算は限られていますので、概算が膨らんで再々評価することもしばしばです。

今後の開発は、教職員画面のリニューアルに重点を置いて進めています。使いやすさとサポートを充実させ、受講者の利便性が大きく向上することをめざします。さらに、利用者拡大の取り組み、オンデマンド研修の利用促進、ECEQ[®]との連携等についても喫緊の課題と捉えています。

ゆたかなまナビシステムの改修は、単に機能追加、性能向上、不具合修正といった範疇にとどまらず、教職員の人材育成をより効果的かつ効率的におこなうための投資に他ならないと考えています。これからも受講しやすい環境づくりのために皆様とともにゆたかなまナビシステムを育ててまいりますので、引き続きご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。



床メンテナンス・張替え対応

あらゆる技術で、
園の床に起こる
さまざまな課題を解決！



園舎の健康診断
園舎診断アプリ

園舎管理もプロにアウトソーシングする時代！
園舎管理を「属人化」から「仕組み化」へ

修繕計画のセカンドオピニオンとして活用しませんか？

園舎管理
保育DX



株式会社 エコテック



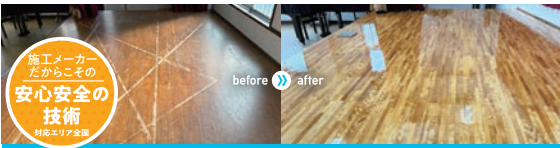
株式会社エコテック

フリーダイヤル
0120-963-093

全国対応



eep
園児の床 HP



施工メーカー
だからこそ
安心安全の
技術
対応エリア全国

before after

安全 健康とケガ（ササクレ）のリスクに備える ※コーティング種類による
歩きやすく転びにくいノンスリップ仕様

負担減 清掃負担軽減 維持費負担軽減

日々のワックスがけは時間的にも体力的にも負担がかかりますがコーティング施工済みの床なら職員の方の清掃やメンテナンスの負担を軽減できます。



令和7年度
積極
受付中



『続けることこそECEQ[®]』 ～続けたからこそ見えてきたもの～

2回目となる本号では、ECEQ[®]を実施した園の先生へECEQ[®]を実施して得た成果や課題、そしてECEQ[®]実施の経験を活かしての取り組みについてご執筆いただきました。また、ECEQ[®]を終えて自身が感じた思いについてもご執筆いただきました。

聖和学園聖和幼稚園 教務主任／菅野 祐輔

当園は、令和6年度教員研修大会宮城大会の公開保育発表の際に、ECEQ[®]を活用しました。その中で多くの学びと園運営に生かせる財産を得ることができました。本報告では、ECEQ[®]で得た成果と、取り組みから1年を経た現在も続けている質の向上の実践をご紹介します。

1. 園の課題とECEQ[®]で得たもの

園の課題

ECEQ[®]に取り組む際、園として抱えていた課題は教員の年齢層がベテラン層と若手層に二極化していることで自然に、指導する側とされる側という構造が生まれ、「対話」の文化が十分に醸成されにくい状況になっていたことでした。さらに、パート勤務教員の増加により、園としての方向性の共有や意思疎通が円滑に行えていないという課題がありました。

ECEQ[®]で得たもの

ECEQ[®]や公開保育を通じて、園として最も大きく実感したのは、子どもを中心とした保育チームを機能させるためには「対話」という土壌が不可欠であるということです。同時に、「対話」を実現するために、付箋を活用した話し合いや否定のないコミュニケーション、自園の「良さ」に気付く研修がとても有効であるということに気付きました。また、「対話のある保育チーム」という土壌が自分たちに大きな安心感をもたらすことを、知識としてではなく実体験として心に刻むことができたことは、ECEQ[®]終了後も取り組みを継続する大きな原動力となっています。



2. 「やってよかったECEQ[®]」のその後

ECEQ[®]を終えて、約1年が経過しました。試行錯誤しながらも、「続けることこそECEQ[®]」という考えのもと、取り組んでいる実践を紹介します。

◆園内研修の充実

主な内容

- 全ての研修において『対話』を核として構成する
- 保育のヒアリングや語り合いの時間を重視する
- 付箋やICTツールを活用し、意見を出し合える環境を整備する
- 副担任や預かり保育教員向けの研修を実施する

ポイント

指導する・されるという構造ではなく、保育チーム全員が共に学び合う存在というマインドを伝えていきます。

◆保育を志す学生も共に

当園は同じ学園内に保育者養成学部のある短期大学があり、年間数回、約80名の学生を受け入れています。

主な内容

- ECEQ[®]コーディネーターのように伴走者として指導教員が接することで、学生が保育に関わり、保育の面白さに触れるシステムを構築する
- 中心活動を含む実習では、企画・保育・再構成までを共に考え、試行錯誤する
- 観察実習ではECEQ[®]式を取り入れ、「問い」と付箋を活用して、学生の観察眼を深めるサポートとディスカッションを重視する
- 実習生からの多角的・客観的な意見を学びの材料として吸収しつつ、教員のファシリテート力向上を図る

ポイント

園内だけでなく、保育を志す学生との関わりにおいても指導ではなく「対話的学び」の文化を醸成することを目指しています。



3. 続けたからこそ見えてきたもの

私自身、ECEQ®実施当時はクラス担任と教務主任を兼務しており、各STEPへの取り組みはまさに無我夢中でした。その中で、コーディネーターの先生が私たちの姿を受け止め、考えを認めながら方向性を共に考えてくださったことは、大きな安心につながりました。

しかし、ECEQ®を終えた後は、道を照らしてくれる存在がいなくて「どれだけECEQ®を自分たちのものにできているか」が問われているように感じました。正直、自信をもって進められることは少なく、「これでいいのだろうか」と迷う日々が続きました。

それでも、迷いながら継続する中で、園の保育や仲間の変化、研修での感想、実習生の成長、さらに短期大学教員からの「学生の学びの質が違う」との言葉など、さまざまな場面でECEQ®の価値を実感できるようになりました。

特に印象に残っているのは、今夏に副担任や預かり保育担当教員を対象に実施した「自園の良さに気付く園内研修（ECEQ®と同じ手法）」です。研修後の感想で、卒園児の保護者でもある教員から「いいところがたくさんある幼稚園。もっと多くの方に知ってほしい。改めて、子どもを聖和に通わせて良かった」という言葉をいただきました。その瞬間、まるでコーディネーターの先生が再び私たちを受け止め、肯定してくださっているように感じました。

また、8月の第16回幼児教育実践学会での口頭発表の場でも、多くの先生方と語り合いながら同じ感覚を得ることができました。

この経験を通して、「これでいいのだろうか？」という問いの答えは、仲間をはじめとした身近な人々や、さまざまな人との対話の中にあると気付きました。そして、それはECEQ®の取り組みを続けてきたからこそ得られた実感なのだと思います。

ECEQ®後の取り組みはまだ1年ほどですが、今では自信をもって「自分たちのECEQ®」が始まっていると胸を張ることができます。今後も継続して取り組みながら、対話を核とした『聖和のECEQ®』を築き上げていきたいと考えています。



Hot News

Vol.4



ECEQ®の初級編と位置づけ、ECEQ®の基本を学んでみたい方を対象とした動画を配信しています。各STEPの実際の映像を交えながらECEQ®の実施が、どのように幼児教育の質向上につながっていくのかを武蔵野大学教授の箕輪潤子氏に解説いただきました。また、動画内では実際にECEQ®を実施した先生方からの感想をご覧いただくことができます。

※研修スタンプが必要な方はゆたかなまナビよりお申し込みのうえご視聴ください。

動画の視聴はこちらから➡



「幼稚園・認定こども園キャリアアップ研修テキスト」を用いたオンデマンド研修再配信のお知らせ

中央法規出版株式会社より刊行している、当機構監修「幼稚園・認定こども園キャリアアップ研修テキスト」を用い、以下5分野のオンデマンド研修の再配信を行います。

●配信コンテンツ：「保健衛生・安全対策」「食育・アレルギー対応」「特別支援教育」「乳児保育」「マネジメント」

●申込期間：令和7年10月24日（金）10：00～令和7年11月18日（火）17：00

●視聴期間：令和7年12月12日（金）10：00～令和8年1月13日（火）17：00

研修内容等、詳細は右記QRコードかゆたかなまナビよりご確認ください。

※令和7年8月配信分の再配信となりますのでご注意ください。

